

岸本裕史の名言

〜本当の学力論が出てくるのは… 岡 篤(兵庫)

平成元年採用の教員として

私は、今年教職二十九年目です。つまり、平成元年に採用になりました。

平成の間、ずっと教員をしていたということになります。平成の教育を振り返るということは、自分の教員人生を振り返ることでもあります。

新卒以来の教育界の動きをぼんやりと考えてみました。浮かんできるのは、生活科、週休二日、総合的な学習、民間人校長、学力テスト、教育基本法、英語、道德の教科化、といったところです。

これらを見直して感じるのは、それぞれがランダムに出てきたのではなく、明らかに一つの方向を目指して動いているということです。

そこには、臨教審の存在が厳然としてあります。

臨教審 「戦後教育の総決算」

臨教審は、「戦後教育の総決算」を掲げる中曽根首相の直属として一九八四年に設置されました。答申は、一九八五年から一九

八七年の間に、四次に渡って出されました。

平成元年は一九八九年なので、答申にだされたことが実施されていく過程が平成の教育政策だという見方もできます。

もちろん、文科省内外にそれぞれの政策についての支持派と反対派があり、直線的に進んできたわけではありません。

例えば、学力テストを見てみましょう。

始まりは、一部の抽出された学校で行い、結果は公表してはならないとしていました。

それが今では、全ての学校で実施され、結果は公表されるようになりました。日本中の教育委員会が点数の上下で一喜一憂という状況ではないでしょうか。

英語もはじめは、異文化ふれあいという

説明を受けました。読み書きをしてはいけないということでした。

これもいつのまにか、指導するべき単語の数まで指定されています。

本質的に同じ動きをしていると思われません。

エリート の 価値 と 意義 と

教育政策の大きな流れとして、グローバル化、自由化があります。そして、それに応えるだけのエリート（あまり使われなくなった言葉ですが）の養成が教育現場に求められることになります。

折々に言ってきましたが、私は、エリート の 存在 自体 は 否定 しません。

獨創性という点でよく例に出されるステイブジョブスが生み出したものは、世界中の人々の生活に変化を与えました。

ヴィッセル神戸に入ったスペインの至宝と呼ばれるイニエスタ選手のプレーは、ファンだけで無く、Jリーグの選手たちにも大きな刺激になっています。

どちらも特別な存在価値を持っています。「第二のステイブジョブズを生むには」

といった表現もときおり目にします。

しかし、ステイプジョブスは自分の娘には、iPhoneもiPadも触らせなかったそうです。そんなことよりも「外で遊びなさい」と言ったというのです。

イニエスタ選手が所属していたバルセロナは養成にも力を注いでいます。ヴィッセル神戸が三十億円といわれる投資をしたのは、単に選手としての能力だけでなく、ユースからバルセロナ一筋で過ごしてきた経験をチームに還元してもらおうという意図もあるからです。

表面的にはエリートの姿だけが目に付きますが、見えない部分では配慮や準備もあったということが見落とされがちです。

教育実践の中の「エリート」

教育実践としても私は、「エリート」を活用しています。実際には、「お手本」「子ども先生」「名人」といった言い方をします。縄跳びをしても、九九をしても、元々得意で好きで上手な子がいます。

こういう子は、休み時間なども自主的に練習し、工夫し、どんどん上手くなってい

きます。

この子たちに、「お手本」「子ども先生」「名人」をやってもらいます。そうすることで、上位の子たちは教える立場になることで輝き、中位の子は友達に教えてもらうという刺激で活気づき(または、「子ども先生」がいることで効率的に伸びていき)ます。

そして、私は、苦手で嫌いで下手な子への指導に重点を置きます。はじめは、やる気のない子どもたちも、ていねいに関わると一人二人と伸びを見せたり、頑張る場面が出てきたりします。

そういった指導が功を奏すると、クラス全体に前向きな雰囲気が出て、それぞれの子が力をつけ伸びていく状態になります。私は、この状態を「上昇気流が吹いた」と呼んでいます。

「本当の学力論は、二二世紀半ばに」

岸本裕史先生は、「本当の学力論は、二二世紀の半ば頃にならないと出てこないのではないか」と言われました。

厳しい教育現場になると、なんだか状況

は悪くなる一方のように感じられます。しかし、振り子は振りきると必ず戻ると言う考え方もできます。

二十一世紀半ばまであと三十年程度です。ずいぶん先のように思えますが、私は来年で教職三十年になります。そう考えると、やはりあつという間ともいえます。

もしかしたら、「本当の学力論」にとって今の学力実践が貴重な提起となっているかもしれません。全国フォーラム参加者数や会員数に頭を悩ませる常任委員会ではありますが、それも「本当の学力論」の生みの苦しみだったといえるのかもしれないわけです。

私は、基本的に小心者です。しかし、ときとして楽天才になります。それは、高い理想や目標を掲げたときになりがちだということも分かっています。

「星を望んで地を歩め」は、家本芳郎先生から教えていただいた言葉です。

「本当の学力論」という星を目指しながら、目の前の子どもに向かう現場は、けっこうかつこいかもしれません！